

明治前期のペスタロッチャー主義教育

——大正自由教育の原点——

影 山 昇

目 次

はじめに

I 明治前期のペスタロッチャー主義
教育導入の背景

II ペスタロッチャー主義教育の導入
と展開

III 『改正教授術』正・続篇全5巻
の出版とペスタロッチャー主義教育
の盛衰

むすび

はじめに

アメリカのオスウェーギー師範学校が中心となって推進されたペスタロッチャー主義教育を軸としたオスウェーギー運動 (Oswego Movement) と、明治前期のわが国のペスタロッチャー主義教育との統一的な把握とその解明をめざして取り組んだ研究が、修士論文 (東京大学) 「明治前半期におけるわが国のペスタロッチャー主義教育とその背景」 (昭和36年度・未刊) であった。

その後、この研究の一部を集約した「オスウェーギー運動と明治前期のわが国のペスタロッチャー主義教育」なる論稿を『愛媛大学紀要〈教育科学〉第14巻第1号』 (1967) に発表した。

この同一主題に関連した研究成果をみると、オスウェーギー運動の内容と本質に迫る阿波根直誠「初期ペスタロッチャー主義教育導入に関する教育史的考察」 (『琉球大学教育学部紀要・第14集』1971)、市川純夫「オスウェーギー・ノーマルスクールにおける教員養成カリキュラムの分析と考

察」(教育史学会『日本教育史学・第19集』1976)、村山英雄『オスウェー
ー運動の研究』(風間書房・1978)といった一連のすぐれた諸研究が生
まれている。

そこで本論稿では、明治前期にわが国に導入されたペスタロッシー主
義教育が、実は成城小学校をはじめとして展開された大正自由教育の実
践の原点ともいえるべき先駆的な役割を果たす内実を備えていたことを論
証することをめざした。

I 明治前期のペスタロッシー主義教育導入の背景

明治前期のわが国近代小学校の成立過程にあつては、教育内容の整備
拡充に伴う教材定着の効率化をめざす近代教授法を求めて模索が続いて
いた。そしてペスタロッシー主義教育のわが国への導入も、その動きの
一つであつた。

さらにペスタロッシー主義に基づく教授法がわが国に導入されるまで
の期間をみると、前史及び三つの時期に区分してみることができる¹⁾。

まず前史をみるに、幕末期にすでに和蘭書を中心とした初等教育関係
の洋書類にその一端が伝えられていた。すなわち、その頃のオランダ初
等教育界では、プリンセン(P. J. Prinsen, 1777~1854)を推進者とするペ
スタロッシー主義に基づく教育実践が定着していたところから、わが国
に伝えられた書物にも、「数の知識に関するペスタロッシーの教育法」を
はじめとするペスタロッシー流の教育が紹介されていた。だが、それは
「意図的に導入されたものではなく、初等教育関係書輸入の附随の所産
としていわば流入とでも言うべき状態にあつた」ところから、それはた
だ単にペスタロッシー主義教育が存在したということの紹介の域を出る
ものでしかなかったのである²⁾。

かくて第1期に入ると、この期では明治5年(1872)9月に開校した
東京師範学校でのスコット(M. M. Scott, 1843~1922)の指導による一斉
教授の時期であり、それは近世期の寺子屋教育でみられた個別教育と異
なり、多数の生徒に同時に一定の教材を提示して教授する経済的かつ効
率的なものであつた。そして、こうした教授形態は東京師範学校を中心
として全国に広く伝達され、普及していく。特にこの期では、東京師範
学校制定の「小学教則」中の「問答」科において、すでに「文字の学習

表1 明治前期・翻訳教育書原著国別刊行状況一覧

刊行年 (明治)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
国別																								
アメリカ			1			1	2	3	7	2	3	4		1		1		4	2	7	2	2		42
イギリス						1		1			1		2	1		1	3	9	1	3	1		1	25
ドイツ							1	3					2						1	4		1		12
フランス						1		1		1		1				1		1		1			1	8
ベルギー																			1	1		1		3
オランダ		1																1						2
オーストリア																	1			1				2
カナダ																						1		1
スイス																				1				1
ロシア																							1	1
不詳									1				1					2						4
計		1	1			3	3	8	8	3	4	5	5	2		3	4	17	5	18	3	4	4	101

から事実在即しての学習への転換」³⁾という“実物教授法”の考え方が認められている点が注目される。

つづく第2期は、明治8年(1875)から同10年(1877)頃にかけて、主としてページ(David Page, 1810~1848)やカルキンズ(N. A. Calkins, 1822~1895)やシェルドン(Edward Sheldon, 1823~1897)等の“庶物指教”が広く紹介された時期である。すなわち、ページの著書(“Theory and Practice of Training”)が伊沢修二(→『教授真法(初編)』名古屋師範学校・明治8年)やファン・カステル(→『彼日氏教授論』文部省・明治9年)によって訳出され、さらにコメニウス(J. A. Comenius, 1592~1670)やペスタロッチー主義教育に基づく参考図書として広く利用された黒沢寿任訳による『加爾均氏庶物指教』(文部省・明治10年)、さらには永田健助・関藤成緒共訳『叢書庶物指教』(文部省・明治11年)が刊行され、教育現場の実物教授理解に大きく貢献している⁴⁾。

この第2期において特に注目される点はすでにアメリカのオスウェーゴ師範学校での「ペスタロッチー主義の教授法が紹介されているので

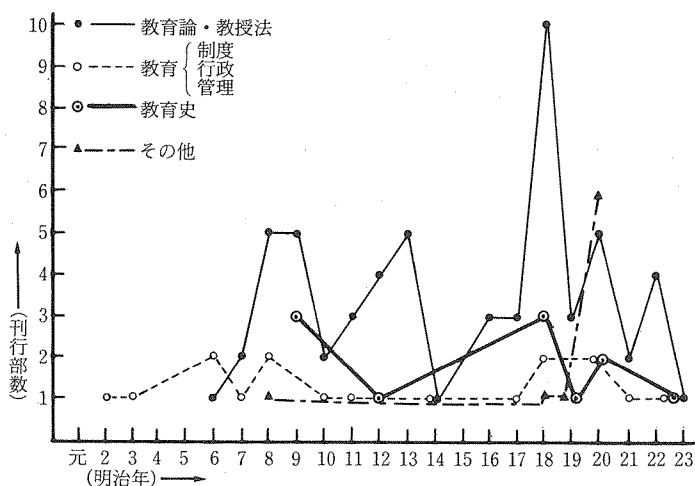


図1 明治前期の部門別・刊行年別翻訳教育書グラフ

あるが、その全体への影響力は顕著ではな⁵⁾く、かえって全国の諸学校では「単語図を用いておこなう授業の解説をなした教授方法書によって、庶物指教の考え方が普及⁶⁾していったところにあった。

以上、第1・第2の両期で共通している点があり、それはアメリカ教育につよく影響されているということで、この点は〔表1〕の「明治前期・翻訳教育書原著国別刊行状況一覧⁷⁾」をみても明白である。

さらに両時期にみられた当時のわが国教育界でつよく要請された教育部門をみると、教育論や教授法の両分野に集中して、その点は〔図1〕の「明治前期の部門別・刊行年別翻訳教育書⁸⁾」をみれば一目瞭然である。

では当時、どうして特にアメリカの教育書がこの両時期に主として導入されたのであろうか。

第1の理由は、日本の開国がアメリカによって強要されたことであり、第2には日本の明治維新期の教育方策の確立に深い関心と理解を抱いていた森有礼が外交官としてアメリカに駐在しており、森の尽力によってマレー (David Murray, 1830~1905) の来日が実現し、彼の教育諸提言が広く日本の教育方策に結び付いていたことにある。さらに第3点としては明治初年のわが国教育行政の中枢にいた田中不二麿や西村茂樹、九鬼隆一といった文部官僚たちが深くアメリカ教育の先進性につよく共

感していたことも⁹⁾、その理由に加えることができよう。

こうして教育界の動向のなかで、明治11年(1878)4月にアメリカ留学から帰国した伊沢修二(1851~1917)や高嶺秀夫(1854~1919)が東京師範学校で親しくその成果を伝達し、そこから誕生した教育書が『改正教授術』であり、この一書でアメリカ型のペスタロッcher主義教育の原型ともいべき開発主義教育が全国規模で展開され、全盛を極めていく契機をつくっていくのであるが、この時期がまさに第3期に該当するのである。

II ペスタロッcher主義教育の導入と展開

ここに引用したのは、伊沢修二がアメリカ教育を吸収するための留学途上に妻に宛てた書簡の一節である。

謹呈

(前略) 明治八年七月十二日東京より横浜に赴く十二時過より離筵をひらき 森氏家内始め(中略)みな打寄別杯を酌み終りて品川より蒸汽車に乗り横浜にゆきたり(中略)文部長官始め諸吏員横浜まで出張して別詞を贈り且饗応ありたり 其席に列する人々

文部大輔	田中不二麿
同五等出仕	辻 新二
同六等出仕	内村長蔵
開成学校長補	浜尾 新
文部大属	平野 勝

右は文部省の官吏なり

信州小諸の人	神津専三郎
文部省八等出仕	
奥州会津の人	高嶺秀夫
同	
同不肖	修二

右は師範学科取調として米国へ派遣するもの¹⁰⁾

ところで、本書簡中にある神津や高嶺、それに伊沢のその後について

みてみると、神津はニューヨーク州の州立オルバニー師範学校に留学、高嶺はオスウェーゴ師範学校へ、さらに伊沢はマサチューセッツ州のブリッジウォーター師範学校へと留学している。しかも彼等が入学した3校はすべてペスタロッcher主義教育に基づく実践研究校として知られていた学校であった¹¹⁾。

まず神津についていえば、彼の学んだ師範学校の校長が『彼日氏教授論』で知られるページであり、本書は明治9年(1876)12月に文部省より、和蘭のファン・カステル(漢加斯底爾)訳で広く紹介されたが、その原著者がページその人であった。

『彼日氏教授論』によれば、

教育ハ人心ヲ啓発スル所ニシテ(中略)、人ノ心意ヲ活潑ニシ、且ツ由リテ成長セシムル訓誡ニシテ、特ニ学芸法則ヲ教フルニ止マルニ非ザルナリ。教育ノ教育タル所ハ、人心ヲ鼓舞勸励シ、其心氣ヲシテ知識ヲ開達シ、意思ヲ拡張スル志望ヲ発セシメ(中略)児童ノ心意ヲ挑ミテ其事物ヲ思想スル習慣ヲ自得セシメ、若クハ視察記憶思慮推考ノ力ヲ養ハシムル(中略)。教育ハ唯人ノ才能ヲ誘導シ其動作ヲシテ常ニ正道ヲ履マシムルニ在ルノミ¹²⁾。

とあり、かかる教育観に立脚したページ校長の教育理論及び教育実践を学び取った神津は、帰国するや音楽教育を通じてわが国へのその定着に全力投球していく。

すなわち、帰国後すぐに文部省に戻り、明治14年(1881)以降は伊沢修二とともに音楽取調掛の中心的なスタッフとして当時の学校教育に音楽教育の定着を目指し、あわせ神津は東京音楽学校の幹事兼教授として明治27年(1894)まで勤務し、音楽史・楽典・音楽理論の講義を担当して音楽教育の後継者養成と普及に大きく貢献しているのである¹³⁾。

続く高嶺秀夫と伊沢修二の両名については、主として学校教育全般に関わりをもつわが国の教員養成と教育実践分野で、大きな役割を果たしていく。

まず高嶺は明治11年(1878)4月に帰国し、続いて伊沢も父の逝去の報に接して帰国。そこで課せられた2人の仕事が東京師範学校の具体的な改革の推進であった。

当時の学校長は秋山恒太郎で、高嶺と伊沢はともに文部省の“雇”の身分であったが、明治13年(1880)3月になると、伊沢が学校長に、高嶺が学校長補に就任するに及んで、同校の全面的な改革の機はまさに熟するところとなった。

すなわち、「従来の師範学校は、其名あって実なき学校とも評される。何となれば、師範学校の名はあれども、其教える所は學術知識の伝達に在って、それを伝達するにも、徒に文字によるのみにして、其の知識の探討に心を注ぐのでもなく、言はば当時の他の種類の学校と、少しも異なる所なき有様であった。そこで、之を改革して、欧米の師範学校のような、真の師範学校たらしめんと、先づ其の大綱を定むるため、先生(筆者注・伊沢修二のこと)は校長補高嶺秀夫と共に熱海に行き、二週間も世塵を絶って考えを練り、遂に成案を得て帰り、二人協力して其改革を決行した。そして、其の改革の要は、先づ第一教則の改正、第二試業法の更定、第三簿冊の整理と、此三項に分って」¹⁴⁾すすめていった。

まず最初の“教則の改正”をみると、「学科を(一)格物学 (二)史学及哲学 (三)数学 (四)文学 (五)芸術 の五とし、之を各学年に配当して、それぞれ修学時間を定めた。次に学年は予科二年・高等予科四年・本科一年とし、予科及本科を修了した者には、小学教員免状を与え、高等予科及本科を修了した者には中等教員免状を与えることとした。そして予科では、普通学を教え、高等予科は其程度を高くし、本科に於て、教育学・心理学・教授法及実地授業をばして、茲に師範学校の特色に意を注がしめた」¹⁵⁾のであった。

続く“試業法の更定”をみると、「其一は、従来試験が定時に行はれたので、生徒は平常なまけて居ながら、試験前に至ると、俄かに徹夜で復習する、所謂試験勉強では、真に学力がつかぬから、此弊を矯めようと言ふのである。そこで、試験を二種に分けて、一は学年末の定期試験、一は不定期で、唯其度数だけを極めて、平素いつ試験があると知れぬと言ふので、終始油断をさせぬという趣向である。又其一は、従来の試験は諸学科は合計点に依って、及落を定めたのである。これは普通教育に従事する者が或る学科の知識を欠くと言ふことでは、其職務の執行上に差支があるからである。試験は或る意味に於ての鞭撻法であるから、此鞭撻宜しきを得る時は、學業の進歩大いに見る可きものがあ」¹⁶⁾

るとしている。

ついで「簿冊の整理」をみると、「凡そ事務の整理を計るには、其事業進捗の経路を知る可き記録が必要である。総ての改善も、之を参照して行はれ、其成績の良否も、之に依って知らるるのである。(中略) 今日こそ各種の学校に、各其必要の帳簿を備えて、学校事務を帳簿上に観取し得るの道もあれど、当時の学校の簿冊は、実に混沌たるもの(中略)。各種の簿冊は、1. 在学生徒履歴明細簿 2. 毎月授業出席表 3. 課業出席調査簿 4. 各級出席平均百分数一覧表 5. 試業評点調査簿 6. 試業評点一覧表 7. 活力統計表の七つであ」¹⁷⁾り、伊沢と高嶺の両名による改革の断行は、その後の日本の教育界に多大な影響を及ぼしていくことになるのである¹⁸⁾。

ところで、以上みてきたような改革が着実に東京師範学校の内部に浸透していくなかで、アメリカ留学中に学んだ各種の教育学や心理学・生理学の諸書を参考にして教育学一般の体系化を目指した教育書ともいべき『教育学』を伊沢修二は著している。

本書は、明治15年(1882)10月に上巻が丸善商社書店から刊行され、さらに同年12月に上・下合巻が再刻・出版されている。

ついで本書の構成をみると、一般教育概念の統括的把握、それに智育・徳育・体育の各論講述が主体となっている。そして、伊沢によれば、「教育トハ人ノ心カト体力トヲ育成シ其諸力ヲ正道ニ応用スルノ才能ヲ得セシムルノ謂ヒニシテ即チ完全ナル人物ヲ養成スルノ術ナリ」¹⁹⁾とし、「心身上ノ諸力教養ノ目的ヲ達センニハ其手段如何ニシテ可ナルヤ 唯適當ナル各種ノ学科ヲ用ヒテ其諸力ヲ煥発培育スルニ在リ」²⁰⁾、幼児教育にあつては特に実物教授が不可欠であるとも説いている。

すなわち、「各官(筆者注・視官、聴官、触官、嗅官、味官をさす)皆殊別ノ物性ニヨリテ發育ヲ被ルモノナレハ一官ヲ教養スルハ必ス其相当ノモノヲ用ヒサルヘカラス 然ルニ色ヲ教授スルニ当リテ実ノ色ヲ用ヒシテ之ヲ教ヘントスルカ如キ又実物ヲ用ヒシテ其物ノ形質ヲ教ヘントスルカ如キハ誤レルノ甚シキモノト言フヘシ 何ヲ以テ其目的ヲ達スルコトヲ得ンヤ 故ニ茲ニ(中略)曰ク人ノ知識ハ其初メ外物ヨリ来ル 外物ヲ知覺スルハ感覺器ニヨラサル可ラス 外覚性ハ諸心力中最初二旺盛ナルモノナリ 故ニ外覚性ノ教養ハ幼時ニ於テ最緊要トス 其教養ノ法ハ諸種ノ物性ニ接セシムルニ在リ 諸種ノ物性ニ接シムルニハ実物教授

ニ非レハ能ハス 是レ実物教授ノ幼時ニ緊要ナル所以ナリ」²¹⁾と。

他方、高嶺秀夫においては、オスウェーゴー師範学校で学んできたペスタロッチー主義教育を内実とする開発主義教育の普及に積極的に乗り出していった。

高嶺は伊沢とともに東京師範学校の改革に従事する傍ら、オスウェーゴー師範学校での教育実践研究の理論的な支持者であり、かつ高嶺自身とも親交のあったジョホノット (J. J. Johannot, 1823~1888) の教育理論を下敷きにした教育学や教授法を学内で講義し²²⁾、その理論に基づいた教育実験は東京師範学校附属小学校でなされ²³⁾、さらに明治15年4月にいたると、日本全国の小学師範学科取調員が東京師範学校附属小学校に集められ、教授法の具体的な伝達講習が実施されたこともあって、ペスタロッチー主義教育を内実とした「開発主義教育」の名は広く国内各地に知られていくところとなったのである²⁴⁾。

あわせ、ジョホノットの教育実践理論の普及に貢献したいま一つのものが、彼の原著 (書名: Principles and Practice of Teaching, 1878) の訳書を、高嶺が『教育新論』(普及舎・明治18年)と題して出版したことであり、同書はまた有賀長雄の手によっても『訳註如氏教育学』(牧野書房・明治19年)と題して翻訳出版されている。

しかも、これら二つの訳書は、伊沢の『教育学』とともに、「数年間には師範学校の教科書として全国に用いられ (中略)、凡そ三万部を売捌いた」²⁵⁾というから、明治10年代から20年代にかけてのわが国において、「最も広く普及した教育理論書」²⁶⁾ということになったのである。

そこで以下では有賀の『如氏教育学』によって本書の構成等をみてみることにする。

すなわち、第一章から第六章までは教育と教授の本質に関わる原理的な理論展開を目指している。続く第七章から第九章にかけては、直観教授の教育実践原理としての位置づけを試みることで教授法上の一大転回点をなしたとしてペスタロッチー、さらには彼の教授原理を発展させ、子どもの自発的な活動を軸として幼児教育の実践をより堅固なものとしたフレーベルに対する積極的な評価を加え、さらに近代科学の内容と方法とを教育に導入して近代教育の方法原理確立に貢献したアガシスの系譜の上で、ジョホノット自らの教育学理論の構築を目指すことができたということで、ペスタロッチー、フレーベル、アガシスの3人の紹

介を詳細に試みている²⁷⁾。そして、第十章以下では、体育・知育・徳育の三育を中心とした教育論と「身軀修練」「好尚修練」「道德ノ修練」「一般之課程」(教科課程)「地方学校及ヒ其編成」といった順序で、個々にわたる詳細な検討が加えられているのである。

Ⅲ 『改正教授術』正・続篇全5巻の出版と ペスタロッcher主義教育の盛衰

伊沢修二や高嶺秀夫の直接の指導の下にあった東京師範学校教諭・若林虎三郎と同校附属小学校訓導・白井毅の両名は、伊沢や高嶺、特に高嶺の説く教育理論にいたく共鳴し、それを各教科に応用し、より実践的な教材開発とその定着に努め、その成果として実ったのが『改正教授術』(普及舎・明治16~17年)の正・続篇の全5巻であった。

まず本書の冒頭には高嶺秀夫の序文がある。

「(前略) 我国維新ノ后王政ノ隆興ト共ニ教育ノ道煥然觀ヲ改ム特ニ教授ノ方法ノ如キハ古来単ニ記誦注入ノ法ニ拠リシモノ今ハ變ジテ開発抽出ヲ重シズルニ至リ是レ教育者ノ主トシテ着目ス可キ要點ナリ 然ルニ若シ教育者ニシテ教育ノ變遷ニ応ゼズ己レヲ改良スルノ道ヲ求メズ徒ラニ (中略) 旧習ヲ墨守スルトキハ夫ノ人ノ子ヲ賊ヒ社会ノ進路ヲ碍クルノ責ヲ免レザルベシ 頃日若林氏白井氏ト共ニ教授ノ方法ヲ編著シ名ケテ改正教授術ト曰フ (傍点・筆者)²⁸⁾

続いて若林が「自序」を記しており、そこには本書のもつ特色が鮮明に表明されている。

ペスタロッヂー首メテ心理学ノ主義ヲ教育上ニ實用セシヨリフレーベル、アガシス輩之ヲ紹述シ近來スペンサー、バイン等悉ク教育ノ根柢ヲ心理学ニ取ラザル可ラザル所以ヲ論述シタルヲ以テペスタロッヂーノ巧益顯レ凡欧米ノ教育ヲ説クモノ多少其見解ヲ異ニスル所アリト雖要スルニ此範圍ノ外ヲ出デズ 此等ノ刺撃ハ大ニ我国教育家ノ腦裏ニ感触ヲ与ヘ從來空誦暗記ノ弊ヲ一洗シ教授ノ方法ヲシテ心性開発ノ点ニ傾向セシムルニ於テ惟レ日モ足ラザルガ如シ 抑モ我

東京師範学校附属小学校ノ如キハ数年来大ニ教育ノ面目ヲ改メ教授其法ヲ得テ教具悉ク備ハリ彼鳥獸草木金石ノ標品ヨリ理化地理諸學用ノ器ニ至ルマデ苟モ生徒ノ心力ヲ開達提醒スルニ裨益アルモノハ一トシテ蒐集セザルハナシ 於是乎學室ハ心性ヲ養成教練スル処事物ヲ實驗操作スルノ場トナリ生徒ノ智識確實ニシテ其進歩亦著キヲ見ルニ足レリ (中略) 昨明治十五年七月偶文部省ノ命ヲ奉ジ福島県伊達郡ノ教員ヲ講習スルニ与ルコト四十有余日ニシテ其教授セシ所ノ各課ノ草案 (中略) 卷ヲ為シ京ニ歸ルノ後同好ノ士其草案ヲ得テ參考ニ供セント請フ (中略) 故ニ白井毅氏ト謀リ大ニ増刷補刪訂ヲ加ヘ梓ニ附シテ廣ク教育者ノ覽ニ供シ聊カ我國ノ教育上ニ於テ改良ノ一助タラシメント欲ス (中略) ペスタロヂーノ教育ニ名アルハ徒ニ卷帙ヲ繙閱シタルノ効ニ非ズシテ数年間実地ニ經驗 (中略) シタル結果ナリ 故ニ諸君若シ能ク生徒ノ性質動作心性発達ノ順序及其能力ノ作用ト關係トヲ觀察シテ其理ヲ講究シ之ニ加フルニ慈愛ト熱心トヲ以テ而シテ教授ノ授業ニ任セバ其術ヲ得ルニ於テ乎何カ有ラン哉²⁹⁾。

本書をさらに読み続けていくと、「(一)教授法ノ主義 (二)疑問ノ心得 (三)方法書ノ必須 (四)批評ノ諸点」³⁰⁾の4項目にわたる各教科における各教材定着のための教授法上の共通した諸原則その他が提示されており、その中でも第一に示されている「教授法ノ主義」は本書の中心となるもので、「ペスタロヂー其他教育家ノ幾多ノ理論ト經驗トヲ積ミテ組成セルモノニシテ現今教育諸大家ノ一般ヲ是認スル所ノモノ」³¹⁾であり、「此書モ亦此等ノ主義ニ基キテ編述」³²⁾されているとし、以下にみるように、「教授上ノ主義」を9項目に集約している。

一、活潑ハ兒童ノ天性ナリ

動作ニ慣レシメヨ

手ヲ習練セシメヨ

二、自然ノ順序ニ從ヒテ諸心力ヲ開發スベシ

最初、心ヲ作り後之ヲ給セヨ

三、五官ヨリ始メヨ

兒童ノ發見シ得ル所ノモノハ決シテ之ヲ説明スベカラズ

四、諸教科ハ其元基ヨリ教フベシ

一時一事

五、一歩一歩ニ進メ

全ク貫通スベシ

授業ノ目的ハ教師ノ教ヘ能フ所ノ者ニ非ズ 生徒ノ学ビ能フ所ノ者ナリ

六、直接ナルト間接ナルトヲ問ハズ各課必ズ要点ナカルベカラズ

七、觀念ヲ先ニシ表出ヲ後ニスベシ

八、已知ヨリ未知ニ進メ

一物ヨリ一般ニ及ベ

有形ヨリ無形ニ進メ

易ヨリ難ニ及ベ

近ヨリ遠ニ及ベ

簡ヨリ繁ニ進メ

九、先ヅ総合シ後ニ分解スベシ³³⁾

しかも、これら9項目にわたる教授法上の諸原則については、「全くシュルドンの小学校教授論の中にあるペスタロッツ法、及び原理 Pestalozzian Plan and Principles と題するもの」³⁴⁾と同一であることは、すでに吉田熊次が自著『本邦教育史概説』中で論証しているところであるが、これら諸原則は広く教育界でみな教授上の一般的な原理として認められたものであったともいうことができよう³⁵⁾。

本書のもつ重要性に鑑み、以下でさらに本書の内容につき具体的に考察してみる。

すなわち、さきに指摘した各教科教材教授上共通する諸原則や一般的な指導上の留意事項を提示した後、本書で各教課(→教科)が示され、かつ各教課ごとの教授実践事例が示されている。そして、そこで共通している点は各教課に従って教授上の一般的留意点を掲げ、ついで授業者サイドの諸注意にも言及、あわせ各教課ごとの授業展開事例が教案のかたちで示されていることである。

ところで、明治16年(1883)に刊行された本書(「正篇」〈全3巻〉)は当時の教育界にあって「愛顧頓ニ増シ印行日ニ急ナリ 知ルベシ新主義教授法ノ已ニ位ヲ輿論ノ中心ニ占ムル」³⁶⁾という程の圧倒的な支持を得て

いった。

そこで、「正篇ハ其ノ教授法ノ例ヲ示ス僅々七八学科ニ過ギズ 世ノ教育家タル者大ニ遺憾ヲ訴フルノミナラズ功ヲ半成ニ染ルハ又余輩ノ意ニアラズ (中略) 其ノ正篇ニ漏レタル諸学科ノ教授一例ヲ編纂」³⁷⁾することとしたとして、翌17年(1884)に「続篇」〈全2巻〉が急ぎ刊行されるというほど好評振りをみた。

されば以下に『改正教授術』(正・続篇全5巻)の構成とその内容分析とをまとめてみた(「表2」)³⁸⁾。

本書の内容を分析してみても強調されている教授方式の基本はといえば、終始一貫「問答法」による児童の心性開発という一点で、それ故に「開発主義教授法」と呼称されるようになったものということができよう。

さらに、そこで説かれている「問答」の内容をみると、典型的な一問一答式の形式をとり、時に「級決教可」に訴え、その間に「各唱斉唱」が加わって教授活動が進行していく。そして、こうした教授法の「型」を各教科各教材に適用し、教案中にくわしく具体的に叙述しているのである。

さて、「改正教授術」を中心とした開発主義教育の主張は、「器械的の域を離れて漸次開発的の教授法を使用するの趣向」³⁹⁾を生み、それに拍車をかけたのは「主として県立師範学校卒業生の漸次赴任するに原因」⁴⁰⁾していた。

さらにその背景をさぐれば、明治15年(1882)9月に全国「各府県から該地方の有為なる実教育家二十四人の師範教育取調員を教授法改良の目的を以て東京師範学校に召集せられ、偶々米国に留学せられた最初の教育学研究者伊沢修二並に高嶺秀夫両氏が去る明治十一年帰朝せられたので、両氏を始めとし同校教育学専門科教員諸氏のベスタロッチー主義の開発教授に関する講習を受けさせ、同時に宣伝に従事」⁴¹⁾していたこともあった。

いずれにしても、『改正教授術』が刊行されるや、「其の標語たる『心力開発』は、本邦の浦々にまで響き渡って、開発主義を知らざるものは教師に非ずとまで言はるゝに至った」⁴²⁾ほどであった。そして、かかる傾向をいっそう強めたのが明治18年(1885)4月にみられた「心性開発を格言とする開発社の創設」⁴³⁾であり、機関誌『教育時論』の創刊され

表2 「改正教授術」(正・統篇全五巻) 内容分析一覧表

事項 教課	位置づけ	内 容	枚数	傾 向	各篇巻数
修 身	教育の中核にすえる	修身上の知識 と品行の教授	15	説話・人物主義による生徒の心の 感動の喚起をめざす →品行の演練	正篇・巻1 (なお、こ こには「端 緒」<6枚> あり
読 方	普通学課中的もっとも 基礎的なものとし て最緊要のもの		8	文字と観念との結合による基礎と なる文字・言語の習得 →読本の意義・読解	
作 文	読方と補完関係		8	「文法的順序」による範例教授 →随意文の自作	
習 字	半独立的な付属関係 教課		2	時間をかけての反復練習	
算 術			17	直観(→視覚)による数観念の開発 →四則への適用	正篇・巻2
地 理		測定・方位・ 測地・地誌	18	周囲の事物の観察測定 →作図・作地図 村落地誌 →各国地誌 (各々への発展がめざされている)	
画 学		用 器 画	14	幾何学的図形の作図練習 →形体の理法の考察 →実地のデザイン工夫	
博 物	理学主義の立場が明 確に打ち出されている。	動 植 物 植 物 物	43	自然物の実験・観察・分類・比 較・推理 →実験・観察・推理力の練習と自 然現象の理解	正篇・巻3
歴 史	修身との結合		11	尊王愛国の志気を育成すべき事 実の説話、修身処世上に補益すべ き事実の説話 →それらの精確なる観念の伝授	統篇・巻1
理 化 学	高尚の課業	物 化 理 学	14	実験・観察による物理、化学諸現 象の考察 →自然法則の理解	
生 理		人 体 ・ 生 理	4	博物および理化学の知識による人 体の構造と機能との考察	
幾 何	心力錬磨に最適の教 課		9	実物教授による幾何学初歩 →推理力を中心に、観察・記性力 を加え、総合的に心力を錬磨する	
経 済	高尚な学なるも、基 礎は小学校に入れよ との提案	経 済 学 初 歩	8	勤労(労働)、財本などの観念の開 発 →修身の道(節儉・勉勵)に通じ かつ経済・理財の初歩	
唱 歌	新設課目で実験途上		6	合唱練習・音符・歌詞の解説等	
体 操			2	徒手体操と器械体操	
試業法 (14枚) 附録 ① 東京師範学校小学師範学科規則 ② 東京師範学校中学師範学科規則 ③ 東京女子師範学校規則					統篇・巻2

(註) 枚数合計179枚 (頁数は倍になる)。ただし、「教課」だけの枚数。

るや「其傾向益々増長し、開発主義の一語は羽翼を生じて全国を飛」⁴⁴⁾ぶが如き勢いであった。

しかしながら、かかる心性開発を目指した教授法は、それまでの迂遠にして現実と実用に程遠い教授法に対して新鮮かつ生気を与えることには確かに成功したのであったが、現実展開された教育現場での実態は「修身（中略）又地理、歴史、物理、化学、経済、生理等ノ教授モ皆字句文章ノ学ニシテ其ノ問答ノ法亦筆問筆答ニ依ルモノ多ク其問題ト答文ハ全ク其課書中ノ文章ヲ摘記スルニ過ギズ 試ミニ口を以テ問答セシムレバ生徒ノ答フル唯筆ヲ口ニ換フルノミニシテ学科ノ真旨ヲ解スルモノ殆ド稀ナ」⁴⁵⁾る状況と墮していき、さらに状況は形式に走り、「当時の實際教育では、ペスタロッチの直観主義の本旨を悟らず開発教授と問答教授とをはきちがえて、何でも問をかけて生徒に答えさせれば開発」主義教育が実践されているものと考えするような、安易で表面的な教授活動が教育現場で支配的になっていった。

こうした実情の現出は、子どもの心性開発を主張されながらも、結果としては教授活動が次第に「技巧に走り形式に流れ、児童の如実の心理を察せずして、徒らに無用の問答を重ね、時間を空費」⁴⁷⁾していったとの厳しい批判も生み出していくこととなるのである。

むすび

明治前期のわが国の学校教育は、モデルを欧米先進諸国に求め官立の東京師範学校が文部省と一体になって新しいカリキュラムを作成し、教える内容に見合った教科書編纂に励み、教授用の掛図や教具等を考案し、各教科目の設定と教授上の留意点に配慮しつつ、新時代にふさわしい教育実践の創出に向けて懸命に教育関係者が努力を積み重ねていた時期であった。

そうした状況は、以下にみるように、明治前期に相次ぎ刊行された主要翻訳教科書の動向からも明確に読み取ることができる。

明治 2 年 (1869)

〔和綴〕 内田正雄訳『和蘭学制』（全 2 巻） 開成学校

明治 3 年 (1870)

- 〔和綴〕 小幡甚三郎訳『西洋学校軌範』（全2巻） 慶応義塾
- 明治6年（1873）
- 〔和綴〕 箕作麟祥訳『教導説』（全2巻） 文部省
- 〔和綴〕 佐沢太郎訳『仏国学制』（全10巻） 文部省
- 〔和綴〕 田中不二麿編『理事功程』（全15巻） 文部省
- 明治7年（1874）
- 〔和綴〕 米、ウイケルスハム著
箕作麟祥訳『学校通訳』（全9巻） 文部省
- 明治8年（1875）
- 〔和綴〕 柴田承桂訳『普魯士学校規則』 文部省
- 明治9年（1876）
- 〔洋綴活字〕 米、エスハート著
蘭、カステール訳『学室要論』 文部省
- 〔洋綴〕 米、ページ著
蘭、カステール訳『彼日氏教授論』 文部省
- 明治10年（1877）
- 〔洋綴〕 仏、トリビエー
土屋政朝訳『仏蘭西学制』 五東堂（滋賀）
- 〔洋綴〕 黒沢寿任訳『加爾均氏・庶物指教』（全2巻） 文部省
- 明治11年（1878）
- 〔洋綴〕 米、ノルゼント著
小泉信古訳『那然小学教育訳』 文部省
- 〔洋綴〕 米、シェルドン著
永田健助訳『塞兒敦氏・庶物指教』（全2巻） 文部省
- 〔洋綴〕 英、カルテルウール著
甲斐織衛訳『加氏教授論』 文部省
- 明治12年（1879）
- 〔洋綴〕 フレーベル原著 関 信三編『幼稚園法二十遊嬉』 青山堂
- 〔洋綴〕 米、ホルブルーク著
山成哲造訳『和氏授業法』 文部省
- 明治13年（1880）
- 〔洋綴〕 独、フエケール著
村岡範為訳『平民学校論略』 文部省
- 〔洋綴〕 英、スペンサー著
尺 振八訳『斯氏教育論』（全巻） 文部省
- 明治14年（1881）
- 〔和綴〕 西村貞訳述『小学教育新編』（全5巻） 金港堂
- 明治15年（1882）
- 〔洋綴〕 伊沢修二『教育学』（全2巻） 丸善商社
- 〔洋綴〕 伊沢修二『学校管理論』（全2巻） 丸善商社
- 明治16年（1883）
- 〔洋綴〕 英、アレキサンダーペイン著
漆田寿一訳『倍因氏教育学』（全3巻） 酒井
岩本

〔洋綴〕 米、ヒロブリアリス著『教育史』（全2巻）小笠原書房
西村茂樹訳

〔和綴〕 若林虎三郎著『改正教授術』（3巻）普及舎
白井綴訳

明治17年（1884）

〔洋綴〕 奥、スタイン著『行政学教育篇』文部省編輯局
文部省訳

〔洋綴〕 英国J.S.ラッセル著『職業教育論』文部省編輯局
菊地大策訳

〔洋綴〕 英、ハリス著『教育汎論』（前橋）報告堂
橋本武訳

明治18年（1885）

〔洋綴〕 米、イラメイヒュウ『咪氏教育全論』文部省
著文部省訳

〔洋綴〕 英、ゼイムス、ライチュ著『七大教育家列伝』普及舎
普及舎訳

〈注〉ジョン・ロック、ペスタロッcher、ベル、ランカスター、ウエール

ダースピン、ストウ、スペンサー以上7氏と伝記の教育論略説

〔洋綴〕 米、ジョホノット著『教育新論』（全4巻）普及舎
高嶺秀夫訳

〔洋綴〕 米、ゼームス・ジョアンノ著『如氏教育学』（全2巻）牧野書
房
有賀長雄訳

〈注〉高嶺秀夫と同一のジョホノットの著書の翻訳

〔洋綴〕 英、ジョセフ・ランドン著『学校管理法』（全2巻）丸善商社
外山正一訳

〔洋綴〕 英、フランクランド著『化学教授法』文部省編輯局
秋山政篤訳

〔洋綴〕 矢野恒太郎編『自由教育論』文宝堂

〈注〉スペンサーの教育論の第1編の抄訳⁴⁸⁾

つまり文部省と官立東京師範学校が中心となつてのわが国の教育改革への取り組みの大きな成果が、わが国に導入されたアメリカ経由のペスタロッcher主義教育、つまり所謂「開発教育」の全国各地への普及であつた。

ここでは、「心性開発」をキーワードとし、従来の画一的で形式に終始した機械的な詰め込み本位の教育を排除し、児童・生徒の内面にある可能性を教師主導の「問答」による教授活動を通じて顕在化させ、より確かな教材の定着によって最終的には子どもの自発性や総意・工夫を導き出そうとしており、こうした教育実践の姿勢はまさに大正自由教育の先駆をなす内実をすでに準備しているものであつたといふことができよう。

ところで、全国各地の小学校で競って展開されていったペスタロッcher主義教育はやがて次第に「問答」による教授方式が先行し形骸化し

てしまい、ベスタロッチャーが探究した教育の方法原理、つまり子どもの内面に眠っている生命力を重視した直観主義、生活主義、相互教育に基づく実践主義、全機会主義等を一体化した道徳の心情の陶冶といった教育の基本的な諸原則から次第に遊離する結果となってしまった⁴⁹⁾。

それというのも、教育現場で特に追求されたものが、あくまでも教授法上の改善という一点にのみ集中し、教材自体の検証や、子どもの発達上の心理の重視を叫びながらも教授技術の技巧に走り、次第に形式重視の問答主義教授に堕していき、そのことが明治20年代に入って、ヘルバルト主義教育の本格的な台頭を許していくことになっていくのである⁵⁰⁾。

註

- 1) 稲垣忠彦『明治教授理論史研究』（評論社・昭和41年）、51-53ページ。
- 2) 中野善達「オランダから流入したベスタロッチャー教育法」（教育史学会『日本の教育史学・第10集』昭和42年）、161ページ。
- 3) 稲垣忠彦、前掲書、52ページ。
- 4) 尾形裕康「西洋教育移入の方途」（『野間教育研究所紀要・第19集』講談社・昭和36年）179-180ページ参照。

なお、ここに「庶物指教」というのは「直観的な方法によつて的確な概念を構成し、これに言語を結びつけようというベスタロッチャーの方法原理を意識して授業を進めるべきことを強調」（五十嵐清止ほか「明治初期における教授研究の発展」『東京学芸大学昭和29年度特別研究報告・明治初期における初等中等教育の歴史的考察』〈昭和30年3月〉・54ページ）したもので、「実際のやり方は、従来の単語図その他の文獻的なものに引きずられ、『指教図』中心に問答を進める形であった。（中略）教師一般の傾向は、指教図を巡って所定の問答書に拠つて問い、生徒も問答書によつてきまつた答をすることを正法のように思い込んだから、（中略）反覆練習と諳記が」（五十嵐清止ほか・前掲論文〈前掲『特別研究報告』〉42ページ）わが国での庶物指教の内実となつてしまつたのである。

- 5)～6) 稲垣忠彦、前掲書、52ページ。
- 7) 尾形裕康、前掲論文（『野間教育研究所紀要・第19集』）、169ページ。
- 8) 尾形裕康、前掲論文（『野間教育研究所紀要・第19集』）、164ページ。

9) 尾形裕康, 前掲論文(『野間教育研究所紀要・第19集』), 161-162ページ参照。

10) 故伊沢修二先生記念事業会編纂委員会編『楽石伊沢修二先生』(故伊沢先生記念事業会・大正8年), 28-30ページ。

なお、伊沢修二(1851~1917)は信濃国伊那郡高遠生れ。高遠藩士。明治2年(1869)に東京に出、中浜万次郎より英語を学び、翌3年に貢進生として大学南校に入学。同7年に文部省に入り、愛知県師範学校校長となる。同8年(1875)8月、アメリカ合衆国留学を命ぜられブリッジウォーター師範学校に入学。その間、A. G. ベル(A. G. Bell, 1847~1922)に視話を学び、L. W. メーソン(L. W. Mason, 1821~1896)に音楽を学ぶ。同10年7月に同師範学校を卒業、ただちにハーヴァード大学に入学するも、翌年、父の死に遇い帰国。東京師範学校に任ぜられ、体操伝習所主幹も兼務した。同12年(1879)10月、音楽取調掛主任となり、同14年、文部省少書記官となる。会計局副長、地方学務局、音楽取調掛長を兼ね、15年(1882)に編輯局次長、同18年(1885)に文部省権大書記官、編輯局次長となり、翻訳教育書出版に力を入れた。

——田辺尚雄「伊沢修二」(城戸幡太郎編集代表『教育学辞典・第1巻』岩波書店・昭和11年), 52ページ。以下『教育学辞典』と略す。

11) 吉田熊次「伊沢修二・教育学解題」(吉野作造編輯担当代表『明治文化全集・第10巻』(日本評論社・昭和3年), 38ページ。

12) ペイジ原著
カスターナル訳『彼日氏教授論』(前掲『明治文化全集・第10巻』), 166ページ。

なお、原著者と本書の意義については、吉田熊次が以下のように考察している。

「ダウイット・ペルキンス・ページ氏はニュー・イングランド生れだが、其の家は小農で頗る苦学をした人である、彼は殆ど独学で早くより小学教師となり、西暦千八百三十八年にニューヨーク州が最初の師範学校を創立するに当って、ページ氏はホレース・マン等の推薦で其校長となった。(中略)本書の原書は千八百四十七年に出版された。其の序文によると過去2年間に於けるオルバニー師範学校の講義を集めたものである。(中略)本邦にペスタロッツ法を正式に伝えたのは高嶺秀夫氏であるが、ペスタロッツ思想はそれよりも前にページ氏の教育論を通して伝わって居たのである。」

——吉田熊次「彼日氏教授論解題」(前掲『明治文化全集・第10巻』), 26-27ページ。

13) 岸本英夫
海後宗臣共編『日米文化交流史・3』(洋々社・昭和31年) 281ページ。

堀内敬三ほか編『日本唱歌集』(岩波文庫), 240-250ページ参照。

- 14)~18) 故伊沢修二先生記念事業会編纂委員会編, 前掲書, 46-49ページ。

なお, 高嶺秀夫(1854~1910)は会津若松城下の藩士忠亮の長男として生れ, 明治元年(1868)に藩主の近習役を命ぜられた。明治3年より東京にて, 英学を福地源一郎・沼間守一・箕作秋坪に就き修める。翌4年(1871)慶応義塾に入学。明治8年(1875), 文部省より師範学科取調のためアメリカ留学を命ぜられ, 主としてオスウェーゴ師範学校(当時, アメリカにおけるバスタロッチー主義教育運動の拠点校)に学び, 同11年(1878)帰国し, 東京師範学校校長補に任ぜられた。同14年には東京師範学校校長に。さらに同19年(1888)には東京高等師範学校が設立されると教頭に任ぜられ, 同24年(1891)には高等師範学校校長に任ぜられ, 終焉までこの任にあり, わが国師範教育建設の仕事に終始した。

彼の生涯で日本の教育界への大きな貢献の幾つかは, アメリカで学んできたバスタロッチー主義教育の成果を開発教育の名をもってわが国へ導入したこと, オスウェーゴ師範学校留学当時の校長シェルドン(E. A. Sheldon, 1832~1897)の教育理論に啓発され, また同校教授クリュージの家に寄宿し彼の指導もあって, バスタロッチー教育法を理解した。そして帰国後も在米中に親交のあったジョホノットの教育理論を参照して, 教育学や教授法を東京師範学校にて講義し, 新教育思想の先達となったことなどである。

——海後宗臣「高嶺秀夫」(『教育学辞典・第3巻』), 1552-1553ページ。

- 19)~20) 伊沢修二『教育学・上巻』(丸善商社書店・明治15年)〈前掲『明治文化全集・第10巻』〉, 462ページ。

なお本書には, 「附録」として詳細な「教育学用和英対訳分類一覧」が掲載されており, 本書が伊沢のアメリカ留学による成果の一つであることがわかる。

〈若干の例示〉「教育」・Education, 「智育」・Intellectual Education, 「徳育」・Moral Education, 「体育」・Physical Education, 「実物教授ノ要」・Importance of Object Teaching

- 21) 伊沢修二, 前掲書・上巻(前掲『明治文化全集・第10巻』), 467-468ページ。

- 22)~23) 吉田熊次『教育学説と我が国民精神』(目黒書店・昭和9年), 32-33ページ参照。

なお, 以下にみるジョホノット原著・高嶺秀夫訳『教育新論』(全4巻)

〈普及舎・明治17年〉中「巻一・教育新論緒言」の一節により、高嶺とジョホノットとの関係や、高嶺がジョホノットの教育理論を意図的に講義していたことがわかる。すなわち、「余往年師範学科取調ノ命ヲ奉シテ北米合衆国新克州ニ在留セシトキ広ク該国ノ教育家ト交ヲ結ヒ特ニジョホノット氏ト屢々相面シ共ニ此ノ教育ヲ談論シ裨益ヲ得シコト少ナカラス（中略）當時氏ハ未タ此ノ書ノ著述ヲ了ラス時々其原稿ヲ出シテ余ニ示シタルコトアリシ 而シテ余ノ在留中ニハ未タ其稿ヲ脱セス 帰朝ノ後氏ノ好意ヲ以テ遙カニ之ヲ郵送セラレタリ（中略）故ニ余ハ之ヲ用キテ口授ノ用書トナシ教授セシコト茲ニ数年其ノ成績ヲ考フルニ大ニ見ル可キモノアリ」（同書〈巻一〉教育新論緒言・1-4ページ）と。

- 24) 海後宗臣「高嶺秀夫」（『教育学辞典・第3巻』），1553ページ。
- 25) 吉田熊次『本邦教育史概説』（目黒書店・大正11年），399ページ。
- 26)～27) 稲垣忠彦，前掲書，61-62ページ。
- 28) 若林虎三郎百井 毅編纂『改正教授術・正篇巻一』“高嶺秀夫序”（普及舎・明治16年），3-4ページ。
- 29) 若林虎三郎百井 毅編纂，前掲書，正篇巻一，自序，1-3ページ。

なお、ここに出てくるスペンサー（Herbert Spencer, 1820～1903）とベイン（Alexander Bain, 1818～1903）はともにイギリス人で、スペンサーの“On Education, Intellectual, Moral and Physical”（1875）が尺振八により『斯氏教育論』（明治13年）として訳出され文部省より、その後も小田貴雄訳『斯辺鎖氏・教育論講義』（真理書房・明治18年）や有賀長雄訳『標註・斯氏教育論』（牧野善兵衛〈東京〉・明治19～20年）が出て、スペンサーの名前はわが国教育界に広く知られるところとなる。また、ベインについては、“Education as a Science”（1878）が添田寿一により訳出されて『倍因氏・教育学』（酒井清造ほか一名〈東京〉・明治16年）として刊行されているが、ベイン自身は心理学者であり、彼の心理学説は明治15年に井上哲次郎の『倍因氏心理新説』としてすでに紹介されている。

——辻幸三郎『大日本教育通史』（目黒書店・昭和8年），319-331・384-385ページ参照。尾形裕康・前掲論文（『野間教育研究所紀要・第19集』），181-182ページ。

- 30) 若林虎三郎百井 毅編纂，前掲書，正篇巻一，端緒，1ページ。
- 31)～33) 若林虎三郎百井 毅編纂，前掲書，正篇巻一，1-2ページ。
- 34) 吉田熊次，前掲『本邦教育史概説』，414ページ。414-416ページ参照。
- 35) 稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』（創元社・昭和19年），324-334ページ参照。

36)～37) 若林虎三郎^三編纂，前掲書，続篇卷一，普及舎主刊行叙，3ページ。

38) 本「一覧表」は，昭和35年度の東京大学大学院・大田堯ゼミで，志摩陽伍氏と筆者とが組んで，「明治十年代のベスタロッチャー主義教育」につき研究報告した際に作成したものである。

39)～40) 「新潟県中魚沼郡学事概況」(『大日本教育会雑誌・第27号』明治19年1月31日)，78ページ。

なお，『大日本教育会雑誌』は大日本教育会(わが国最初の全国規模での教育団体)の機関誌で，第1号は明治16年(1883)11月30日である。論説は辻新次・西村貞・伊沢修二各氏が飾っている。

41) 町田則文『明治国民教育史』(昭和出版社・昭和3年)，191ページ。

なお，東京文理科大学『創立六十年』(昭和6年)中「明治十五年四月」の項には，「教授法改良の目的を以て小学師範学科取調員を各府県より召募する計画を立て，九月に至り，其の応募者二十七名を入学せしむ。小学師範学科取調員は在学年限を一年とし，前半は教育学・心理学・学校管理法・諸科教授法等を修めしめ，後半は実施について授業法を練習せしむ。翌十六年七月に至り卒業する者二十二名。」(同書・26ページ)とある。

42) 辻幸三郎，前掲書，367ページ。

43)～44) 藤原喜代蔵『明治教育思想史』(富山房・明治42年)，172-173ページ。

なお，『教育時論』(設立者・辻敬之)は明治18年(1885)4月15日に開発社から世に出た。5の日発行の旬刊。昭和9年(1934)5月に休刊するまで49年間も続き，誌齢1700を越えている。ベスタロッチャーの直観主義，心性開発主義の新風を教育界に吹き込んだその出発から，その後の各時点における時論的な役割は高く評価されよう。

———木戸若雄『明治の教育ジャーナリズム』(近代日本社・昭和37年)，24-28ページ参照。

45) 文部省少書記官伴正順による「宮城福島両県下学事巡視功程」(文部省『教育雑誌・第168号』明治15年9月16日)，37-38ページ。

なお，明治前期の文部省刊行雑誌の発行状況は[表3]にみる通りである。(国立教育研究所教育史料センター『日本近代教育百年史編集史料2・明治前期文部省刊行雑誌目録』〈昭和43年〉・6ページ)

表3 『文部省雑誌』『教育雑誌』『文部省教育雑誌』刊行状況一覧

誌 名	刊行期間	号数および冊数	記事件数	頁 数
文部省雑誌	明治6年(5月) ～同年12月	* 〔1〕～9 10冊	* 16	* 127
同 上	明治7年1月 ～同年12月	1～27 27冊	72	477
同 上	明治8年1月 ～同年12月	1～20 20冊	64	449
同 上	明治9年1月 ～同年3月	1～8 8冊	24	244
教育雑誌	明治9年4月 ～同年12月	1～23 23冊 (別に附録2冊)	** 63	** 780
同 上	明治10年1月 ～同年12月	24～52 29冊 (別に附録2冊)	** 84	** 1,019
同 上	明治11年1月 ～同年12月	53～86 34冊 (別に附録2冊)	** 122	** 1,361
同 上	明治12年1月 ～同年12月	87～113 27冊	76	1,088
同 上	明治13年1月 ～同年12月	114～134 21冊	50	857
同 上	明治14年1月 ～同年12月	135～162 28冊	69	1,070
同 上	明治15年4月 ～同年11月	163～170 8冊	26	334
文 部 省 教育雑誌	明治15年12月 ～明治16年4月	171～174 4冊	8	166
		* 総 計 239冊 (別に附録6冊)	総 計 *** 674	総 計 *** 7,972

〔註〕* 明治6年第7号の重複分を含む。

** 附録分を含む。

*** 上記二者をともに含む。

46) 横山栄次「当時の授業法」(相沢熙『日本教育百年史談』(学芸図書・昭和27年), 85ページ。

47) 辻幸三郎, 前掲書, 367ページ。

- 48) 海後宗臣「教育文献年表」(前掲『明治文化全集・第10巻』), 557-563
ページ参照。前掲『日米文化交渉史 3』中「日米教育交渉史年表」, 483-
490ページ参照。
- 49) ペスタロッチー主義教育の基本原則については, 影山昇「ペスタロッ
チーの道徳教育論——現代に生きる教育の基本原則——」(成城大学文学学
部『成城文芸・第166号』1999年3月) 参照。
- 50) 「日本におけるヘルバルト教育学の導入」については, 影山昇「方法と
教育思想」(小澤周三・影山昇・小澤滋子・今井重孝『教育思想史』有斐
閣・1998年5刷)・69-77ページで考察している。